

## ◆奨励賞◆

### 成長の三年間

中原 中学校 三年

飯田 さくら

私が剣道部に入部したのは、先輩方がとても優しくかったからだった。部活動体験のときに、何度も声をかけてくださり、先輩方と一緒に剣道がしたいと思った。

入部して初めて迎えた夏。私は県大会の団体戦に出場させてもらえることになった。大きな会場、張り詰めた空気、鳴り響く打突の音。立っているだけで緊張した。

試合後、出場記念のバッジを貰った。すごく嬉しくて、私はこれを三年分集めることを目標にした。

県大会が終わると、三年生の先輩方が引退してしまった。さらに夏の稽古は想像以上に厳しかった。息が苦しくて、うまく動けずに注意されて、悔しくて泣いたことは何度もあった。あのバッジを集めるんだと自分に言い聞かせて、なんとか稽古を続けた。

二年生になると、春の県大会に出場することができた。夏も勝つことができれば、順調に目標に進んでいけるはずだった。

しかしその夏、県大会に出場することはできなかった。私は目の前が真っ暗になった。あれだけ努力したのに、目標が叶わなくなったからだ。それでも厳しい稽古は続き、気持ちはどうどん沈んでいった。もう辞めたいと思ったのは、一度や二度ではなかった。

そんな私を救ってくれたのは先生や先輩、仲間たちだった。私の話を真剣に聞いて、励ましてくださった先生と先輩。暑さで倒れそうになり、稽古を抜けてしまったときに水筒を渡してくれた仲間たち。今更だが、その存在に助けられていることに気がついた。

三年生になったとき、私はバッジのために頑張ろうなんて思っていなかった。ただ、剣道が好きになった。

「今日も疲れたね。」

という稽古後恒例の会話、試合前の緊張感、仲間と組む円陣、一本取ったときの達成感、すべてが大切な時間だった。

そして迎えた最後の夏。私たちは県大会に出場することができた。目標だった全年出場は叶わなかったけれど、それよりもずっと大切なものを入れることができた気がした。それはきっと、諦めずに努力した時間と成果、支えてくれた人たちとの絆。そして、辞めなかった自分への自信だと思う。

今、あのときの私に伝えたい。

「続けた先には、涙も悔しさも超えた、バッジのように輝く景色が待っているよ。」と。